

第58回神奈川建築コンクール 一般建築物部門 審査総評 審査委員 大原一興

今年度の一般建築部門への応募は47件あり、昨年よりも11件増加した。

まず、選考の経緯について記しておく、書類審査による一次選考では、あらかじめ応募作品の資格を確認し、各作品に対して各審査委員が評価点をつけ、その合計点の上位の作品から検討していった。合議の上、現地審査の対象となる建築作品を絞った結果、15件が選ばれることとなった。

今年の現地審査は、8月下旬の残暑の中、4日間にわたっておこなわれた。現地視察時に委員から浴びせられる質疑によって、今年の審査対象の傾向や論点が浮き彫りにされていった。

現地視察後の第2回審査委員会では、現地審査での印象や評価について活発に意見交換された後、最終的な選考は投票により、各人の評価点数を合計した数値を参考にして受賞作を選んだ。この結果、最優秀賞1件、優秀賞8件、そしてアピール賞2件となった。現地審査の対象となった建築はいずれも見応えのある優れた作品であったことを付記しておく。

以降は、選ばれた作品全体の印象と、各賞の該当作品の紹介をしたい。

まず、全体の印象だが、応募に多かった大きな建築や活気といったものが今の時代を反映しているかのように感じた。とくに今年は力強い建築が目立ち、大規模な開発と一体となった公共建築や商業施設、オフィスが、その固有の場をつくりあげている印象が強い。環境や文脈にそっと従うのではなく、場所や空間の価値を高めるための建築の存在感や役割を感じさせるものが多かった。ただし、それぞれの建築がただ仕事の大きさを競ったわけではなく、的確に場所の要として機能しているかどうかの空間づくりの技を競い合うことになった。

最優秀賞となった「マークイズみなとみらい」は、人気のある商業施設として成功しているが、建築の質も高い。統率されたデザイン力は企画力や事業力だけではなく、きめ細かさも求められ、地下鉄との関係などにも苦心の跡が見られる。周辺都市環境と対応した形状の工夫や景観配慮、緑空間づくりや植栽の多用など、全体が心地よい公園のような建築空間となっている。

つづいて優秀賞の「江の島 湘南港ヨットハウス（湘南港港湾管理事務所）」は、曲面を使いこなしたそのデザイン力もさることながら、難しい施工を成し遂げた技術力にも感嘆の声があがった。若々しいデザインと、一方でベテランによる確かな技術の絶妙なバランスによる協働作業が、場所性の表現と市民に開かれた開放性とが統合し、環境と一体となった独特の空間を生み出している。

「Silver mountain & Red cliff」は、大学キャンパス内の重要な位置に、学生や運営者の期待する感動を与える形態が提案され、その実現のために技術者が力を合わせた結果として、すぐれた建築となっている。3Dの難しい曲面を実現する施工の難しさ、リハーサルスタジオという機能、シンボルとしての意味を統合させて、外観だけではなく内部も充実した建築として高く評価された。

「慶應義塾横浜初等部」は、住宅地の中にあった学校用地に、今回の建設は地域に歓迎される建築となっている。敷地の高低差をうまく活かし、講堂などの比較的規模の大きい必要な諸室を確保していった堅実な構成で成り立っている。全館土足の強みを活かした小学校で、ゆとりのある空間が随所に配されており、メンテナンスの確実な私立校ならではの利点を活かした質の高さを保っている。

「相模原市緑区合同庁舎」は、周辺の高層住宅や近隣住民への配慮などを慎重に行いながら外観が形成され、公共施設としてきめ細かい建築の質をさりげなくちりばめている。とくに細かな配慮にとむパッシブな環境共生技術の試みは、多くの建築物の参考となる要素を数多く提示している。建築としての技術力と公園にも隣接する公共の利用する建築としての規範として優れた建築となっている。

「荏原製作所 藤沢事務所 本館」は、工場の敷地の中の事務所棟だが、単なるひとつの棟の建て替え・統合としてだけでなく、敷地全体に対する本館の意味を堅実なデザインによって表現している。技術的には光環境、熱環境への取り組みなどが特筆でき、また、機能的にも1400名の利用する食堂の交代制などの運営管理と一体となった総合的な計画性が、全体のデザイン力の確実性、信用性の高さを感じさせる。

「神奈川大学横浜キャンパス3号館」は、住宅地内にあるキャンパスの導入部にあたる場所に立地する建築で、学生の動線に素直に対応した計画、また、見晴らしの良い場所にあることから、魅力的な空間を見事につくりだしている。実際は限られた制約条件の中での施行となり、また共同で設計にあたり環境配慮の工夫も多く、構造についても研究者との協働作業により提案性の高い建築を実現させている。

「bono 相模大野」は、20年来の再開発プロジェクトの終盤にあたる建築となり、大規模の事業の苦心が集約されている。区分地上権により屋内の横丁が生成されたり、モールを抜けるビル風への対応として後からの施工で大風除け板を設置したり、住棟も含まれていることもあり、多様な利用者や権利の調整に非常に多くの努力がはらわれたことが高く評価された。

「川崎生命科学・環境研究センター」は、生命科学団地の一画に建つ公共と民間の共生する施設で、複雑な機能をうまくまとめている。その両者の交流を保障する空間としての吹き抜けは大きく心地よく、単なる民間施設には無いおおらかさをもっており、建築としてはダブルウォールによる環境制御をはじめとして様々なエコテクを駆使した技術力豊かな建築となっている。今回のアピール賞として、防災1件と環境1件を授賞することとなった。

アピール賞（防災）としては、「武蔵小杉駅南口地区東街区第一種市街地再開発事業」で、まさに防災をテーマとした大規模開発、既存棟や住宅、商業施設の連続的な配慮が評価された。

アピール賞（環境）は、「株式会社東芝 電力システム社（京浜）- I」で、シンプルなデザインの中で、敷地内のビオトープなどを活かし、エコ配慮の様々な工夫が成功をおさめている。